



TITLE:

星座の譯名

AUTHOR(S):

野尻, 抱影

CITATION:

野尻, 抱影. 星座の譯名. 天界 1935, 15(171): 322-326

ISSUE DATE:

1935-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167055>

RIGHT:

星 座 の 譯 名

東京 野 尻 抱 影

山本會長が提案された天文用語の整理の中、特に星座名の邦譯に就いては、僕の胸にびしびしと應へたものが多く、また從來の著書や時折りの雜筆の面目からも、當然一日も早く愚見を披瀝すべきだつた。事實あの提案を拜見したその晩、多少の昂奮を以て草稿を作つたのだが、その後様々の事情に妨げられて永い間禮を失してゐた。こゝに發表するのも雜感といふに終るのを惧れる。

現在、日本天文學會で用ゐてゐる星座の邦名は、僕なども學生時代から頭に滲みこんでゐるもので、一々の字や音にまで既に根強い語感を生んでゐる。それに同好の間ではこれらが永年の合言葉になつてゐるのだから、成るべくは在來の傳統を尊重して行きたい。しかし、一端あゝいふ當然な主張が叫ばれた以上は、誤譯や拙譯、特に誤譯は一日も早く改めるのに賛成する。

「天文月報」の第一卷第七號(明治四十一年十月一日)發行の雜報を見ると、星座早見及び天文月報の星座名に對する會員の質問に答へて、「ひ・き」氏は「譯語會(六七人の同志者の會合)にて假に定めたるものにて、不統一なれども未だ決定したるものなき爲め一時的に使用したるものに過ぎず候。同會は目下猶繼續して術語の研究中なれば、近き中に決定的の名稱を發表し得る事と存候。」云々と記して、アンドロメダとかオリオンとかいふ類の名には、神話を引いて簡單な説明を與へて居られる。恐らく、これらの譯語にはその以前文部省で編纂した天文書や、海軍水路局の星座案内書の譯名を参考にされただらうことは臆測される。僕は今かういふ書物を座右に備へてゐないので、比較し得ないことを遺憾に思ふ。

その第一卷時代の天圖と、現在の「天文月報」裏表紙の星座圖と比べても、その後決定的の名稱が發表されたことがあつたのだらうが、僕は知らないし、星座名の變つたものは幾らもない。「牧夫」が「牛飼」に、「寶瓶」が「水瓶」に、「北冠」が「冠」に、「米蕃」が「印度人」に變つたのなどが目につく程度であ

る。かういふ譯で、僕などまだ研究の浅い眼から見ても頭をひねられる星座名もそのまゝ残つてゐると思ふ。同時に山本會長案にも俄かに承服しかねる譯名もあるので、以下、便宜上の順序で卑見を述べ、會長及び會員諸賢の高批を仰ぐこととする。

海蛇 (Hydra) これは會長提案のヒドラに同感である。ヘルクレスが退治した頭が九つある神話적怪物の名で、到底邦譯は與へられない。又、海には何等關係はない。『海蛇』と譯したのは英譯の Water-Snake (水蛇) から來たものと思はれる。最近 Ansell Robin の “Animal Lore in English Literature” を讀んだら、『Hydra と hydrus とは區別すべきで、前者は Hercules の退治した怪物に限られ、後者はギリシヤでは必ずしも Water-Snake に限らず、一般の Snake をも指して言つてゐた』と記してあつた。この理由で、『海蛇 (Hydrus) を水蛇と改稱する會長案も正しいのである。

ペガサス (Pegasus) これは會長は『神馬ペガサ』として提案されてゐるもの、しかし僕は前記海軍水路局の譯名で見た『翼馬』か、むしろ昔からある『天馬』でいいと思ふ。法隆寺獻納の御物銀瓶や正倉院の御物の模様でも廣く知られてゐる翼の生えた馬で、『天馬』の名ですぐ眼に浮ぶ筈である。神馬(しんめ)の感じとは大分違ふやうである。

テーブル山 (Mons Mensae) これは致し方がないと思ふ。La Caille が Cape Town で南天を研究觀測した紀念に、あすこの Table Mountain の名を採用した星座である。地圖を見ても『テーブル』山と出てゐる。『平山』の改稱はこの來歴を忘れさすことになりはしまいか。

望遠鏡 (Telescopium), 顯微鏡 (Microscopium) この二星座も前記 La Caille の設けたものである。『とほめがね』と改稱することは、なるほど十八世紀時代のまだ素樸な機械を床しく偲ばせるが、文政六年 (1823) 出版の『遠西觀象圖說』には既に望遠鏡の語が現れてゐることを舉げて、『顯微鏡』に對する池田政晴氏の御意見 (三月號) を併せて、これら二星座の名は現在のまゝでいいと言ひたい。

牛飼 (Boötes) これは元來『牧夫』(ぼくふ)であつたのが改稱されたもので、會長案では元のまゝの牧夫で『まきを』と呼ぼうとする。神話で熊を逐

ふ獵夫と見る他に、ローマ時代には北斗七星を犁牛と見て Triones と呼び、Boötes をその馭者とする見方があつた。これに依つたものとすれば、牧犬、牛飼どちらでもいい。たゞ、「まき」といふ言葉は人名に使ふ以外には辭典にないやうに思ふし、あつても和語になり過ぎて、却つて耳遠くはないだらうか。そして、もし大熊座との神話的聯絡を考へるならば、Arcturus (Bear-Driver, Bear-Watcher) の意味をとつて、「熊追ひ」或ひは「熊番」座といふことを主張したい。Boötes の語原は異説區々である。

りょう、おほくま、こくま、は標準語を墨守するのではないが、「りゅう」「おほぐま」「こくま」といふ方が、より一般的で言ひ易いのかと思ふ。「獵犬」はかりいぬに賛成する。南魚、南冠等も新説がいいやうに思ふが、間延びのする難がある。僕個人としては「なんぎよ」の名が簡潔だし、特に音が好きで、太平記で讀んだ聖徳太子の未來記の中にもこんな字があつたと記憶する。

僕はこの他に蛇遣 (Ophiuchus) がどうも熟しない譯語だと思ふ。笛を吹いて蛇を踊らす印度人を思つていけない。英譯では Serpent-Holder である。語呂の似てゐる「蛇掴み」では拙いだらうか。右團次の家藝鯉つかみを想ふ地元の諸氏が多からうが、實はあれからである。支那譯の「持蛇夫」はうまい。

コップ (Crater) 凡そ散文的な譯名である。英譯の Cup をかう譯したのだらうが、これではギリシアで酒と水とを混ぜて容れた、兩耳のある臺杯といふ Crater とは頗る縁が遠い。幸ひスポーツの優勝カップの形がよく似てゐるし、在來の譯名も生きるから「カップ」と改めたいと思ふ。

アンドロメダ (Andromeda) 山本會長はこれを「アンドロメ」と讀むことに「女」の字を感ずるとされ、「アンドロメダ」と讀むことをラテン語にこだはり過ぎると言はれる。僕などは「メ」に「女」を感ぜず、叱る時の「奴」(め)の方を思ふが、これはドロ仕合ひだらう。それよりも僕は、外國人も屢々いふやうに、この a, o, e, a の四母音を含み、a で始まつて a で終る音律美を捨て難く思ふ。そして s の男性語尾に對して a が女性語尾であることは、日本語の彦(ひこ)に對する姫(ひめ)の「め」と同じく、さう自由に切り取れるとは思へない。無論この正しい發音はアンドロメダで、拙著「星座神話」にもさう書き表はして置いた。

しかし、これら一々の原音を正すとなると大變な仕事である。天文學者諸公がタレスとして訝まれぬ Thales さへが正しくは「タレース」である。たゞこの際會長の再考を仰ぎたい一事は、ケフェウス(Cepheus)やケンタウルス(Centaurus)の ce, 星名でプロキオン(Procyon)の cy 乃至 ci を「セ」「シ」と發音すべしとの提案である。

これに就いては千年昔のラテンでは k と c と同様だつたが、今ではラテン系の言葉は殆ど例外なく可成り自由に「かう讀む」と言はれてゐる。しかし少くも僕の知る範圍で日本の大學専門學校では、c を「カ」行音、g を「ガ」行音に教へてゐる。また Cambridge の University Press の “The Restored Pronunciation of Greek and Latin ” (1921)には

c always as cat, kitten

g always as get, gone

とあるし、市河三喜博士著「ギリシャ、ラテン語初歩」にも第一頁に c を k と讀むことを最も注意すべき點とされてゐる。さも無くとも Scipio は「スキピオ」 Cicero は「キケロ」として今尚ほ中學の歴史でも教へてゐる筈である。

しかし終りにプレイアデス(Pleiades)を「ブレヤデス」、カシオペイア(Cassiopeia)を「カシオベヤ」と發音すべしとの御説には一言もない。上記の書にもラテンの i は子音で -ia = -ya である。これは、ラテンの原音を示してゐる場合は拙著のものもかう訂正しなければならない。但しギリシャ讀みを採用した場合には、Homer でも Hesiod でも -ia は獨立した -i-a である。プレイアデス、カシオペイアも誤りではない。(會長よ、老獺なりと叱り給ふこと勿れ。)

尚ほ -ia を -ya と發音するならば、事のつひでに、ラテンの -eu は英語の new の ew の如く發音するも可なりといふ説を採用しては如何であらう。いつぞや東京天文臺の水野良平氏は放送の際、「ペルシュース」、いや、「ベルセウス」と言ひ改められたことがあるが、-eu = -ew ならば、「ペルシュース」、ケフェウスみな OK である。又どれほど言ひ易いか知れないと思ふ。

僕の妄言は許された關を越えたかと思ふが、最後にもう一つごろた石を投

げ込む非禮を許されれば、星名の $\alpha, \beta, \gamma, \delta, \dots$ を思ひ切つてその儘の發音で使用し、紛はしい「ア星」「ガ星」を止めて戴きたいのである。大多數の會員諸氏は英語を讀まれる人々で、従つてこの alphabet とその發音を覺えることはさして困難ではない。代數の本でもその一端は教へられる。最初から一氣に覺えてしまふ方が星圖を見るにも二重の手數が省ける。且つ「ア」「ガ」等々の片假名は活字の間に混ると、ゴシックでもない限り、印象が弱いし、誤植をも免れ難いと思ふのである。妄言多罪。(4.21)

天文用語に關する私見 (5)

(特に野尻氏の文に答へて——i)

山 本 一 清

近來、天文々學界に活躍せられる野尻氏の星座の名について愚見に對する御高説は、かねてから大に期待してゐた所である。従つて、別頁の如き同氏の玉稿については敬意を以つて讀んだ。さすがに老練家であるため、自分の如き者の眞意をよく了解せられ、多くの點に於いて、同意して下さるのを嬉しく思ふ次第である。

氏の御意見を拜見して見ると、Hydra を「ヒドラ」、Hydrus を「みづへび」に御同意して下さるのは喜ばしい。

Pegasus は、愚見によれば、神馬「ペガス」であつて、「神馬ペガス」では勿論ない。即ち“神馬”は説明語である。我が日本語には時々このやうな説明語の必要を感じる。何となれば、單にカタカナだけでは、人名だか、地名だか、又は其他の特種な言葉だか、判明しない（殊に、歐米と全く異なつた歴史や人情や、風習や傳統を持つてゐる我が日本人にとつては）ため、第一印象の混亂する場合が多いから。